

日本人間関係学会関西地区会会員各位

平成 23 年 8 月 6 日
日本人間関係学会関西地区会
会長 早坂三郎

第 30 回記念関西地区会研究会報告及び第 31 回関西地区会研究会開催のご案内

震災のためか気候も不順で早い梅雨明けとなり、また節電により例年以上の酷暑と異常気象の夏を迎えておりますが、お変わりないことと拝察致しております。

さて、原発の影響は終息どころか、未だに拡大継続を続けているところに東日本大震災の復旧・復興への困難さがあります。そこで 11 月の大会でも仲田大会委員長が「崩れた絆とその再生」をテーマとしてシンポジウムを企画されておられます。関西地区会としもしも、大会を支援しお役に立ちたいところです。

つきましては、本日は三好明夫会員のご尽力と京都ノートルダム女子大学のご協力を頂き震災復興への願いと支援への思いを込めてのシンポジウムと当初より企画していただきました白澤政和先生の記念講演会による記念地区会研究会の報告と、釜野会員による「介護福祉士養成と人間関係を構築する力との関係について一新カリキュラムの理念の実現に向けて一」と佐々木かなこ会員による「歴史は紡ぐ・絆 ー今、古文書が伝えることー」の研究発表のご案内をお届け致します。何卒、ご参加ください。

尚、今回より大阪・梅田の芦屋大学大阪キャンパスを会場としますので、お間違いのないように、お気をつけください。

末筆ながら猛暑の砌ゆえ、健康にはくれぐれもご留意ください。 敬具

《第 30 回記念関西地区会研究会報告》

日 時：平成 23 年 6 月 4 日（土）午後 1 時～5 時

会 場：京都ノートルダム女子大学 ユニソン会館 社会学習センター①

共催：日本人間関係学会研修委員会

同 エイジング部会

後援：NPO 法人とらい・あんぐる

平成 15 年 10 月に関西地区会を創設、爾来、7 年余に亘り会員の協力のもと継続し、30 回を数えるところとなりました。途中、会員の増加と積極的努力により平成 19 年 6 月の第 14 回より 2 人ずつの研究発表を組むことが出来るようになり、また今年度から希望者の研究発表を公表することとし、一層、会員の研究向上と社会貢献に寄与することと致しました。他にも、語り旅部会に協力し、研修と親睦にも力を傾注してまいりました。

ついては、節目となる第 30 回記念大会を有意義に、そしてより稔り多き研究会とするために本学会の研修委員会とエイジング部会との共催、並びに NPO 法人とらい・あんぐるの後援を得て開催することに致しました。当初は、社会福祉界の重鎮である白澤政和先生による記念講演だけの企画でしたが、3. 11 の東日本大震災が翌日の長野県北部と新潟県を震源とする地震と併せ 1 都 9 県の災害救助法が適用される広範囲の巨大災害となり、且つ根こそぎ何もかも奪い盡した津波と広島・長崎の原爆とも思える福島原発が復興を大きく遅

らせています。放射線の影響と被害は全国、否、世界に及び、先行きを不透明にし、生活不安を更に増大させています。この様な事態から、様々な民間レベルの支援活動も強く求められているので、この巨大震災への復興支援をテーマにシンポジウムを開催してはとの案が承認されました。

そこで、三好明夫会員のご尽力と京都ノートルダム女子大学のご協力を戴き、そして同大学を会場として記念シンポジウムと記念講演会の開催となった次第です。

I. 記念シンポジウム： 「東日本大震災への復興支援について」

今回のシンポジウムは、三好明夫会員にコーディネーターをお願いし、「復興支援」に焦点を絞り、東日本大震災の被災状況についての報告と併せて16年前の阪神・淡路における震災復興の経緯を含め、支援に向け新たな視点と認識を得て、今後の活動に反映することを目的に開催しました。

シンポジウムは、三好明夫会員の挨拶に始まり、各パネリストの紹介の後、早坂関西地区会長からも挨拶と趣旨説明があり、次いで各パネリストから以下のように順次報告と提言がなされました。

● 「引き裂かれるコミュニティ、踏みにじられる尊厳—Fukushima で取材した東日本大震災—」 石川威一郎氏（河北新報東京支社編集部）

石川氏は、この5月末まで福島県郡山市勤務であったことから、この巨大地震復興の大きな妨げとなっている原発事故から、まさに棄民状態に置かれている FUKUSHIMA の被災状況の時系列に沿った報告があり、目には見えずとも生命と健康、そして生活に影響著しい放射線被害の現状と対策の進捗について、また情報過疎となっている「打ち切られた地域」の経済並びに人間関係状況について報告された。

その背景には自分たちは享受することのない核による電気エネルギー問題があり、土地を奪われ生活の術と糧を失い、それでいながら避難所で情報不安・先行き不安・生活不便に置かれ、また他府県に疎開し差別といじめを受ける子どもたち、加えて風評被害と進まない遺体の収容と行方不明の探索の実情が報告された。

寒い・暗い・貧しいのイメージ修正のために何ができるか。リスク回避のための他の地域での買いだめが、見捨てられた人々に更に追い打ちをかけている。こんなところからも我々の支援は始めることが出来る、との指摘もなされた。

● 「石巻避難所での支援活動—東日本大震災から2ヶ月—」 奥村 務会員（三重県心のケアチーム第14班・特定医療法人北勢会北勢病院）

心のケアチーム第14班の平成23年5月23日～26日（4日間）に亘る、今、被災地である宮城県石巻市・鹿妻地区・稲井地区・桃生地区・河南地区で起きていることとは？をテーマに(1)避難所訪問・被災者自宅訪問と(2)消防署員面接を通じての活動報告であった。

(1) 避難所訪問・被災者自宅訪問

百名以上の避難所には自衛隊の炊き出しがあるが、それ以下の所には提供されていない。避難所はプライバシーへの配慮が不足していると考えられるが、同時に孤立の回避ともなっている。ボランティア（医療、看護、介護、リハビリ）が多く滞在し、手厚い介入がなされているが、マスコミのカメラが気になって仕方がないとの訴えもあった。

今回の支援での自宅訪問までの流れは、①各県や団体より派遣された保健師によって、ケアが必要な被災者の洗い出しを戸別訪問にて行う。②石巻市役所の保健師が、必要なケアを選別して各チームに依頼する。③保健師より、またはケアチームより事前に訪問の調整を行う、という手順であった。

(2) 消防署員面接

初面接者、責任者にある人ほどトラウマ反応が目立った。

- ・職員は非番でも津波の被害が大きかったところでの活動を続けている。
- ・震災に伴う混乱や缶詰状態での勤務、これに伴うストレスや疲れなどで爆発したものが上司への直接的突き上げとなって示されることもある。
- ・被害がより甚大な場所で勤務している他の消防隊との比較をしてしまう。周りからも「運が良かった」等と言われると、割り切っているつもりでも、引っかかるところがある。
- ・6月11日には死亡確認がなされる。それまでに一体でも多くの遺体を捜索しなければならないとの使命感が強い。
- ・捜索活動がいつまで続くか分からない。
- ・指揮官として現場に行けない苦しさ、もどかしさがある。
- ・生命の危機と不安を乗り越えて、生活への不満と現生活での満足が同居、拭い切れない罪悪感、残される不満、頼ることへの抵抗、今後の不安、漠然とした不安等が特徴として見られた、とのことであった。

● 「復興支援のための関西経済の役割」 明野欣市氏（IT ガイドシステム推進協議会・ICT 利活用力推進機構）

この震災により人的・経済的基盤及び信頼関係が揺らいだ。日経平均は直後の低下から戻しつつあるが、早い立ち直りが、そして先ず短・中期的及び持続可能な自律的成長の実現が求められる。

元々、関西7府県の経済規模は、全日本の16%であったが、過密、過疎化への施策から地域分散が図られ、関西、就中、大阪は地盤沈下した。しかし、今回の地震により首都圏集中の弊害が再認識され、そこで関西発の先端産業の育成による全国に波及する活性化が急務となった。産業創出のモデル構築が不可欠であり、また新環境エネルギーの取り組み、更には世界に啓く関西として交流を広げることにより、新たな価値を生み出すことが支援の核となる。

(1) 関西経済の特徴

＜関西地域の強み＞

- 1) 多様な製造業の集積、2) 学術・研究機関の集積、3) 文化・歴史・コンテンツの集積、4) 豊富な産業インフラ、5) 関西で進む先端産業等の大規模設備投資

＜関西地域の弱み＞

- 1) 産業構造の変化と製造業の集積の相対的低下、2) 首都圏への中枢機能・人材の流出、3) 土地の制約、4) 不十分な域内連携、5) インフラの利便性の低さ、6) 厳しい地方自治体の財政状況

＜強みを発揮し、弱みを克服するための課題＞

- 1) 集積効果を活かした競争力向上、2) 世界市場化に対応したネットワークの形成、3) 広域連携による効率的なインフラ整備と広域的産業政策の展開

(2) 関西経済の目指すべき方向：日本・世界経済の再生と新たな産業創出モデル拠点となる
＜そのための基本的方向＞

1) 強みを最大限に発揮できる分野を見定め成長を促進、2) 国内外の企業間や産学官の新たな関係を構築、戦略的なオープン・イノベーションを推進、3) 環境・エネルギー等有望分野において最先端モデルとして世界に発信、4) 広域連携によるハード・ソフト両面の基盤整備の推進、5) 世界に開く関西として世界の需要を意識し世界市場の獲得を目指す。広く世界から人材・企業を招き、交流により新たな価値を生み出す原動力とする。以上の提言がなされた。

●「復興支援への阪神・淡路大震災からの考察」早坂三郎会員（福山職業指導学振興財団・芦屋大学）

復興支援について、平成7(1995)年1月17日の阪神・淡路大地震からの災害復興活動過程状況、特に仮設住宅における高齢者の独居死と人間関係並びにコミュニケーションを基軸にした考察と提言であった。

- ・復興過程の行動特徴からの時期区分：第1期パニックと集団形成期、A被害発生直後の緊急パニック期、B物理的近接性を基軸とする集団形成期・第2期悲しみと否定の時期・第3期自我の回復期・第4期復興期とした。
- ・仮設時住宅での高齢化と独居死：仮設住宅での1996年2月末の高齢化率は31.2%となり、その中で死後長期間発見されなかった独居死が相次いだ。死因は病死が主で、その背景には住環境の変化や食事の悪化からもたらされた災害ストレス、不安、鬱的傾向、アルコール依存等があった。独居死の割合は、自殺・事故死を含め男性が72.0%で、60歳代男性が突出し、以下50・70・40歳代男性の順であった。
- ・地域への「粘着度」と動機づけ：仕事・学校・病院など慣れ親しんだ人間関係等の諸要因が震災前の知悉した居住地域への「粘着度」を高めていると考えられた。逆に、コミュニティの分断と粘着度の低下は希望と動機づけを低めていた。

高齢化率が3割を超える地域が増え、震災仮設住宅と同じ状況にあつて、匿名性の高い集合住宅はまさに阪神大震災の再現状況となることを十分に認識し、厳しい環境にある独居死または孤独死、そして自殺への対応策を講じなければならない。

これまで、PTSDとか適応障害などのようにストレスによって心身の疾患が発症すると考えられてきたが、「セルフケア」への支援とか「レジリエンス（resilience 跳ね返す力）」モデルが注目されている。被災者を弱者とするのではなく問題を跳ね返していこうとする人たちとの認識もち、「語られることを聴くこと」により基本的信頼と人間関係を構築しなければならない。

社会的役割や経済力の喪失などが無感覚などをもたらし、不安と悲しみや悲嘆・絶望感は混乱や恨みとなり、やがて個人差はあるものの新たな洞察により回復や他者支援へと推移する傾向が観察されたが、そこに他者を支援しようとする動機付けと目的・手段の認識の変容が自我の回復に繋がるとの指摘があった。

この後、各パネリストの提言内容の総括及びコメントと質問が三好コーディネーターからなされ、各パネリストからの回答と補足説明がなされ、終了した。

Ⅱ. 記念講演：「社会福祉と人間関係—いかに関係づくりを進めるか—」

白澤 政和 先生 (桜美林大学大学院老年学研究科教授・大阪市立大学名誉教授)

【主著】『ケースマネジメントの理論と実際』中央法規出版、『社会福祉援助技術ノート』NHK学園、『ケアマネジメントハンドブック』医学書院 他多数。

【学会及び社会貢献】日本社会福祉学会会長、日本在宅ケア学会理事長、(社)日本社会福祉士養成校協会会長 他多数。

ケアマネジメント及びソーシャルワークの方法の紹介と、そこでの様々な人との関係作り、及び認知症高齢者へのケアマネジメント支援と関係作りについて考えることを本講演のテーマとされた。そして、結果として生活を支えていくこと、生活者のニーズと社会資源(ケアやケア)を結びつけることで生活者の在宅生活等を支援していく方法を具体的に考究する内容であった。

QOLの向上を図り、自己効力感を高めるケアのための新たなケアマネジメントの方法として：1. ストレングス(強さ活用)・モデル：利用者の意欲・能力・自信・嗜好を活用する。2. リハビリテーション・モデル：SST等社会復帰能力を高めることを含める。3. パクト・モデル：治療的側面を含め積極的に対応する、を挙げ、特にストレングスモデル・ケアマネジメントについては、利用者のマイナス面だけでなくプラス面をもアセスメントしケアプランに反映させることであり、プラス面の評価によるものがストレングスであり、本人の意欲・能力・抱負・願望・嗜好といった内容が対象となる。また、利用者が活用可能な社会資源もストレングスに含まれる。こうしたモデルを活用したことで利用者のQOLの向上とコストの抑制が実証されてきた、との事例紹介による説明がなされた。

サルビーのストレングスモデル6原則の解説と共にストレングスの対応としては、利用者がどうして問題をかかえるようになったかよりも強さの観点から、「①何を望むのか、②何が必要か、③どのように得たいと考えるか、④自らの状況(問題と可能性)をどのように見るのか、⑤どのような価値が最高になるよう望むのか、⑥生き残るためにどのようにマネジメントしてきたか」のポイントとCowrerのストレングスのアセスメントでの11の原則を説明された。

また、意欲を高める方法として、些細なことから自己決定及び選択の支援、「したいこと・好きなこと・できること」を言える雰囲気作り、利用者が自信を得ていくコミュニケーション技術の活用、具体的な短期の目標の設定とその結果について共感する。加えて、意欲がでない利用者についても、それを受け止めることが重要であるとのことであった。また、ストレングスモデルでのコミュニケーション技法としては、ナラティブ・アプローチ、否定的な自己から肯定的な自己への援助、レフレーミング(リラベリング)、利用者の否定的感情表出に対する肯定的な解釈を挙げ、ケアマネジメントを可能にする地域社会づくりのために地域の組織化・ネットワークを進める。これがマクロ・ソーシャルワークに相当し、ネットワーク形成につながることを訴えられた。

尚、もう一つのテーマである認知症高齢者に対するケアマネジメントについては時間の

制約上、レビュー小体型認知症の特徴から、その対応についての概要の説明をもって、質疑応答に移った。

まとめ：「利用者やその関係者との関係でもって、ソーシャルワークなり社会福祉援助は成り立っている。特に、意欲にない人、意思表示が難しい人、対立している関係にある場合の支援で、言語的・非言語的コミュニケーション能力が重要である。」と指摘された。

三好コーディネーターの総括と質問に続き、フロアからも数多くの質問が相次いで寄せられた。最後に、ストレングスとレジリアンスの対比についてのコメントを含め早坂関西地区会長から御礼の挨拶があり記念講演は熱気のうちに終了したが、なお質問の列が白澤先生の前に続いていた。

追記：平成 22 年度の年度会費を徴収し、場所を懇親会会場に移して、質疑応答と懇談が続けられた。

出席者：相澤孝志、明野欣市、芦田麗子、天春卓也、淡路由紀子、伊賀吉郎、石川威一郎、市川真也、稲童丸洋、井上敏明、上田靖彦、永藤清子、大崎徹也、奥原佑子、奥村 務、金井塚丁二太、栗山昭子、佐藤貴志、白澤政和、谷川和昭、谷川俊治、寺脇誠一郎、友次秀正、鳥谷晴己、鳥谷順己、富田真奈美、中川祐志、中島康晴、仲田勝美、中村弘樹、西尾孝司、早坂三郎、林 知代、三好明夫、矢島雅子、村山京子、吉田輝美、計 37 名と三好ゼミ学生及びノートルダム大学生。
以上総計約百名

《第 31 回関西地区会研究会のご案内》

共催：特定非営利活動法人とらい・あぐる

①発表者：釜野鉄平（広島福祉専門学校）

テーマ：「介護福祉士養成と人間関係を構築する力との関係について

—新カリキュラムの理念の実現に向けて—

介護福祉士養成校では、新カリキュラムで学んだ介護福祉士が平成 23 年 3 月に初めて卒業した。厚生労働省が示す目的や「人間関係とコミュニケーション」等の科目が設定されていることから、新カリキュラムにおける専門性向上のキーワードのひとつとして「人間関係」構築や「コミュニケーション」が位置づけられていると考えられる。ここでは、これらが身につけているのかについて課程を修了した学生のグループワークを通して考察を行った。その結果、「人間関係」や「コミュニケーション」に不安を感じている学生が多く存在していることが明らかとなった。

②発表者：佐々木かなこ（奈良教育大学）

テーマ：「歴史は紡ぐ・絆 —今、古文書が伝えること—

東日本大震災の日から半年にもなろうとするが、復興は思うように進んでいない。当初、「未曾有の出来事」と言われたが、実は、古文書や地質学的に見ると千年に一度の割合で起き、今回で 5 度目ではないかとされている。その史実を書き記した『日本三代実録』に触れる。発表の中心は、「吉備真備」（遣唐使・学者・政治家・・・公卿）を取り上げる。フィ

ールドワークを通して深めた内容と、平安時代に活躍したとされる陰陽道の安倍晴明との関係を紐解く。また、吉備真備の生き方、とりわけ「ご恩」の表し方に触れる。歴史的な捉え方とはどういうことか、現在のあり方とこれからをどのように考えていけばよいのか「共に考える」機会としたい。（「吉備真備」史料『扶桑略記』『篋篋抄』絵巻物『吉備大臣入唐絵詞』『今昔物語集』の一部）

記

日 時：平成 23 年 9 月 17 日（土）午後 3 時～5 時 30 分

会 場：芦屋大学大阪キャンパス

〒530-0018 大阪市北区小松原町 3 番 3 号 OS ビル 16 階 TEL06-6364-3100

<アクセス>芦屋大学HPで大阪キャンパスのアクセスをクリックしてください。

以下の 7 駅より、地下街で通える好アクセス、雨の日も傘要らずです。

- ・ JR 大阪駅「御堂筋口改札」より 5 分
- ・ JR 東西線北新地駅 「東改札口」より 9 分
- ・ 阪急梅田駅「中央改札口」より 5 分
- ・ 阪神梅田駅 「東改札口」より 4 分
- ・ 地下鉄御堂筋線梅田駅「南改札口」より 4 分
- ・ 地下鉄谷町線東梅田駅「北改札口」より 3 分
- ・ 地下鉄四ツ橋線西梅田駅 「北改札口」より 6 分

*梅田地下街ホワイティ梅田、「ノースモール 2」J4 階段で OS ビルへ

参加費：無料

懇親会：「がんこ・阪急東通り店」 TEL 06-6131-0388

〒533-0018 大阪市北区小松原町 4-7 ニュー大東洋ビル 2F

アクセス方法：芦屋大学大阪キャンパスの隣のビルです。

懇親会会費：5,000 円

《スケジュール》 9 月 17 日（土）
14:30 開場
15:00 開催・挨拶
15:10 研究発表①釜野鉄平会員
15:55 質疑応答
16:10 休憩
16:15 研究発表①佐々木かなこ会員
17:00 質疑応答
17:15 大会打ち合わせ及び次回案内
17:30 終了
※此の後、懇親会です。

尚、会場準備等の都合上、出欠については来る 9 月 13 日（火）迄に、別紙にて FAX 頂くか、[または hayasaka@ashiya-u.ac.jp](mailto:hayasaka@ashiya-u.ac.jp)宛メールにて連絡下さい。勿論、当日参加も歓迎です、090-326-88016（早坂）にご連絡下さい。